

きょうと福祉倶楽部だより

5月号

書籍『「福祉」が人を殺すとき』 から考える日本の福祉

大変ショッキングなタイトルの書籍です。

しかし、日本では人を守るはずの福祉の現場で残念ですけども、タイトルのような事件は多発しているのです。

この本の初版は 1988 年です。当時の生活保護行政の歪みで命を落とした人たちを丁寧に取材した書籍です。そこで告発された福祉の歪みは初版から 27 年たった今でもなくなるどころか形を変えて繰り返されています。

2025 年の今はかつての形だけでなく、形を変えた問題も現れています。

たとえば心身が不自由になった高齢者の入所施設。かつては公益性があった特別養護老人ホームでした。そこでは貧しいものも、豊かなものも所得に応じた費用負担をすれば入所できるものでした。

ところが 2000 年に施行された介護保険以降サービスはお金を支払って購入する商行為となってしまうしました。

つまり「金の切れ目が縁の切れ目」です。そのうえ今は公的ホームの不足を補う施設が雨後の竹の子のように増えています。

それらの施設は高齢者や障がい者を利潤を生むものとしています。

少ない介護報酬で利益を上げるにはいろいろな知恵が必要です。この間報道されている手口を見てみましょう。

難病高齢者を収容する難病ハウスでは必要以上に訪問看護を派遣する。一人で足りる看護を二人でやったことにする。サービス付き高齢者住宅(サ高住)でも自社ヘルパーを必要以上に派遣する。

わたしが目撃したサ高住のケアプランは利用者がまったく外に出ることもしないプランが組まれていました。

もちろんそれらの施設はサービスの利用料だけではなく、入居費用も食事費用もいるのです。

商売としての施設ですから、入居者が費用を支払えなくなると当然退去を求められます。

商品を購入するお金がないのですから、商行為としての「福祉」ならばこれは当然の帰結です

みなさんはそれを福祉と呼ぶことに抵抗はありませんか？

わたしたちはそんな世界を福祉とは呼びたくはないのです。

すべての人が安全に人間らしく過ごせることこそ本当の福祉社会だと考えます。

そんな福祉現場を作っていきたいのです。

